

養護性と親子関係Ⅱ

大井京子* 井森澄江**

Awareness of Nurturance Analyzed from the Viewpoint of Parent-Child Relationships (Study II)

Kyoko OOI* Sumie IMORI**

要約

本研究は、親子関係が養護性にどのように関連しているかを検討するものである。養護性とは“相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能”であり、それらは愛着と深く関連しながらも、別のシステムとして発達していくと考えられる。本研究では、女子大学生とその保護者148組を対象に質問紙調査を行い、養育と介護の観点から関連を探った。その結果、情愛深く育てられたと認識している親の子どもは、同様に情愛深く育てられていると認識していた。他にはあまり関連がみられなかった。そして、ネガティブな認識よりもポジティブな認識において、親子の認識に相関関係が見られた。介護に関しては、積極的に介護に関わろうとする親の子どもは、やはり積極的に介護に関わる意識が高かった。消極的な介護意識の場合は、親子での関連は見出されなかった。養護性に関しては、親子で同様の傾向を必ずしも示すわけではなく、様々な要因が関連していることが示唆された。

キーワード：養護性、親子関係、愛着、世代間伝達、介護

目的

戦後、日本の家族の形態はその後の急激な社会の変化に伴い、その構成や様子を大きく変化させてきたといえる。とくに、最近の少子高齢化は、わが国においていまだかつてなかった様相を示し、養護性（養育・介護）に関しての意識に変化をもたらしているものと思われる。そこで、本報告では養護性と親子関係がどのように関連しているのか、女子大学生とその保護者への質問紙を通して探っていくことを目的とする。

小嶋（2001）によれば、養護性とは、“相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能（ただし小嶋はナーチュランス：nurturance という言語のまま用いている）”であり、養護性の対

象は子どもだけでなく、老人や障害をもった人や動植物なども含むとしている。また、こうした養護性と密接に関連するものとして、愛着があげられる。愛着とは重要な養育者との間にある情緒的な絆であり、子どもはその絆を元に危機的状況に対応し、愛着対象を安全基地としながら探索行動をすすめていくこととなる。つまり、子どもはその愛着対象を通じて人との関わり方や世界に対する安全感を身につけていくこととなる。Bowlby（1969, 1973, 1980）によれば、重要な他者との近接の可能性といった関係性は、加齢に伴いそれまでの経験によって自己と他者に関する「内的作業モデル（Internal Working Models：以下IWMとする）」を形成するとしている。人はそのモデルを適宜想起し、活用することによって、その時々々の危機的状況にうまく対処し、自らが安全であるという感覚および心身の恒常性を保持していくので

*東京家政大学文学部心理教育学科資料室

**東京家政大学文学部心理教育学科 発達心理研究室

ある(遠藤, 2005)。養育に関していえば、その人にとっての重要な養育者との間にある情緒的絆や経験をもとにして、未来において自身が養育者となった場合にその愛着に関するモデルを活用しながら養育していくと考えることができる。しかし小嶋は、愛着と養護性は密接に関連するものではあるが、愛着が自身の中に生きている愛着の対象に対する表象に傾倒するのに対して、相手の心を思いやりその中で生きているのが養護性であるとして、愛着と養護性を区別できるものとしている。また、George&Solomon(1996)によれば、養育行動は愛着と独立に、しかし、発達的にまた行動的にリンクした行動システムとして組織化されると述べている。愛着システムと養育システムとの共有された目標は近接であり、同じく共有された機能は保護であり(数井, 2002)、青年期においては、養育表象システムを自分の中に構築するプロセスの一部として「守る」といった養育者としての自分の表象を「守られる」といった愛着する子どもの表象に対応させつつ作り上げていくこととなる。その基本的な問いかけは、「子どもを守ることができるか (Will I be able to protect a child?)」と「子どもを守りたいか (Will I want to protect a child?)」である。さらに、愛着理論にそうならば、親からうけた養育行動によって形成された内的作業モデルをもとに、自身の子どもへの愛着行動が活性化されるため、子どもは、同じ愛着パターンをとると考えられている。いわゆる愛着の世代間伝達である。養育表象が愛着と密接に関連するのであれば、養育表象も親の愛着表象と関連しているだろう。一方、愛着表象と養育表象が関連しつつも別のものであるならば、親のもつ愛着表象とは別の形で子どもの養育表象が構築されていくと考えられる。さらに、高齢化に伴い、養育という子どもに対するものだけではなく、介護という今まで「守

られる」表象を持っていた親に対して、逆の「守る」立場に変わり、その表象を変化させることが予想される。こうした介護という養護性についても、親子の表象がどのように関連しているのか検討をする。そして、「守る」という養育者としての養育表象を子どもが構築していく上で、青年期までの親子関係がどのように関連しているのか、親子間で一致が見られるのかどうか、親の実際の養育行動の認識等も含めて検討することを本報告の目的とする。

方法

1. 調査方法；東京近県女子大学家政学部および文学部に所属する女子大学生（子ども）とその保護者 148 組（子どもの平均年齢 20.0 歳 範囲 18 歳～22 歳 親の年齢 40 代～50 代）
2. 実施時期；2004 年 7 月中旬
3. 調査方法；夏休み前の授業の最後に家政学部および文学部に所属する女子大学生（子ども）に質問紙を配布、協力を依頼した。女子大学生自身（以下子どもとする）には、大学構内で記入または自宅に持ち帰り記入してもらい、親へは自宅へ持ち帰って記入をしてもらうよう依頼し、配布当日から夏休み明け一週間の間に回収ボックスを用いて回収した。
4. 質問紙調査内容
 - (1) 女子大学生（子ども）への質問紙；育った地域環境、年齢、家族構成、子どもの頃の母親の就労形態、自分の理想の働き方・生き方などを含むフェイスシート 11 項目をはじめ「青年期の親への愛着 (IPA 尺度) (28 項目)」「親の養育態度の認知 (PBI 尺度) (25 項目)」「青年期女子の養護性に関する尺度 (43 項目)」「現在の愛着 (IWM 尺度) (18 項目) と就学前の母子関係尺度 (9 項目)」「両親の関

係 (13 項目)」「娘性に関する項目 (10 項目)」「自分と親、親と祖父母との関係 (13 項目)」「老いてくるだろう親の世話についての気持ちや態度 (12 項目)」の 182 問からなる。

(2) 保護者への質問紙；育った地域環境、年齢、家族構成、子どもの頃の母親の就労形態、子どもの育て方に関する認識などを含むフェイスシート 11 項目 (19 問) をはじめ、「青年期の頃の親への愛着 (IPA 尺度) (28 項目)」「親の養育態度の認知 (PBI 尺度) (25 項目)」「現在の愛着 (IWM 尺度) (18 項目) と就学前の母子関係尺度 (9 項目)」「夫婦の関係 (13 項目)」「娘性に関する項目 (10 項目)」「自分と親、親と祖父母との関係 (11 項目)」「老いてくるだろう親の世話についての気持ちや態度 (12 項目)」「自身の老後に関する質問 (1 項目)」の 145 問からなる。

(3) 本報告での分析項目；子どもと親の質問項目のうち、共通した項目である「青年期の頃の親への愛着」「親の養育態度の認知」「現在の愛着」「就学前の母子関係尺度」「老いてくるだろう親の世話についての気持ちや態度」について、子どもの「青年期女子の養護性に関する尺度」について、親のフェイスシートのうち、子どもの育て方に関する認識についてとりあげることとする。それぞれの詳細については以下の通りである。

i) 青年期の親への愛着 (IPA 尺度)；IPA (the Inventory of Parent and Peer Attachment；Armsden, G.C. & Greenberg, M.T. 1987) Section 1 を藤井 (1994) が回想型に修正した青年期の両親への愛着を査定する 28 項目を参考に、中高生のころを思い出して回答してもらう回想型に修正、「非常によく当てはまる」(6 点) から「まったく当てはまらない」(1 点)

までのうち 1 つを選んでもらう 6 段階評定を用いた。

ii) 親の養育態度の認知；Parker, G., Tupling, H. & Brown, L.B. (1979) が作成した Parental Bonding Instrument 25 項目 (以下 PBI とする)。PBI の日本語訳については、藤井 (1994) を参考にした。評定段階数は原著と異なり、「非常によくあてはまる」(6 点) から「全くあてはまらない」(1 点) の 6 段階評定を用いた。

iii) 愛着、親子関係に関する項目；現在の愛着を測定するために、内的作業モデル尺度 (IWM 尺度；詫摩・戸田, 1988) を用いた。成人の愛着を測定する全 18 項目 (安定尺度 6 項目、アンビバレント尺度 6 項目、回避尺度 6 項目) を「非常によくあてはまる」(6 点) から「全くあてはまらない」(1 点) までの 6 段階評定で回答を求めた。また、幼児期の母子関係に関する項目として、就学前の母子関係に関する項目 (酒井, 2001) 16 項目のうち、就学前の安定的な母子関係、就学前の回避的な母子関係、就学前のアンビバレント的な母子関係各 3 項目計 9 項目を用いて、「非常によくあてはまる」(6 点) から「全くあてはまらない」(1 点) の 6 段階評定で回答を求めた。

iv) 養護性に関する項目；子どもの養護養育者としての準備性を査定する項目と親の養護介護に対する気持ちや態度を査定する項目を用いた。親への養護介護に関する項目として、親を守りたいといった感情に関する項目 3 項目、自力的養護介護の態度 (親を守れるという気持ち) に関する項目 5 項目、自力的養護介護の拒否の態度に関する項目 2 項目、他力的養護介護に関する 2 項

目の計 12 項目からなる。これらの項目は岡林・杉澤・高梨・中谷・柴田 (1999) が在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造を検討する際に使用した項目を参考に独自に作成した項目である。また、子どもの養護養育に関する項目として、岩治 (2004 未発表) の青年期女子の養護性に関する尺度 43 項目を用いた。この尺度項目は、中西・栗津 (1997) の養護性尺度 51 項目、小野寺 (2003) の可能自己尺度の 6 項目、伊藤 (2003) の子ども・子育てに関する意識尺度の 3 項目、伊藤 (2003) の同性の親への同一視・性受容尺度 3 項目からなる計 63 項目に対する、155 名の女子大学生の 4 段階評定の回答について、因子分析 (主因子法プロマックス回転) を行った結果、得られたものである (井森・岩治・清水・大井, 2004 参照)。「子ども赤ちゃんへの関心」尺度 11 項目、「世話、養育に対するポジティブな感情」尺度 10 項目、「親に対す

るポジティブな感情」尺度 9 項目、「将来の子育てに対するネガティブ予測」尺度 5 項目、「愛護のこころ」尺度 4 項目、「奉仕的な志向」尺度 4 項目、の計 43 項目からなる。

「非常によくあてはまる」(6 点) から「全くあてはまらない」(1 点) の 6 段階評定で回答を求めた。

v) 子どもの育て方に関する認識; 親のフェイスシートにおいて、“子どもを育てていく中でどの程度おこなったか”について、“本を読んだり歌をうたったりする”“ほめる”“しかる”“一緒に外出する”“家事などの手伝いをさせる”の 5 項目について「とてもよくやった」(4 点) から「全くやらなかった」(1 点) の 4 段階評定で回答を求めた。また、親の育児に対する以下の意見に同感できるかどうか「はい」と「いいえ」の 2 段階評定で回答を求めた。育児に関する意見とは、“育児は楽しい”“育児は有意義な素晴らしいことである”“自分にとって生き

表 1: 親と子どもの各尺度得点の平均と標準偏差
女子大学生(子ども)

	PBI情愛	PBI依存期待	PBI決定尊重	IPA信頼	IPAコミュニケーション	IPA疎外	IWM安定	IWM回避	IWMアンビバレント
N	145	147	148	147	147	148	147	147	147
平均	4.42	2.67	4.24	4.45	3.59	3.51	3.49	3.00	3.74
SD	0.82	0.91	0.91	0.98	1.01	1.10	0.99	0.84	0.87
	就学前の安 定的な母子関 係	就学前の回 避的な母子関 係	就学前のアン ビバレント的 な母子関係	子どもへの関 心	世話に対する ポジティブな 感情	親に対するボ ジティブな感 情	子育てに関す るネガティブ な感情	愛護のこころ	奉仕的な志向
N	147	147	147	147	146	147	146	147	147
平均	4.70	2.53	2.95	4.65	4.09	4.36	3.58	5.00	3.89
SD	0.97	1.12	0.97	1.12	1.09	0.91	0.81	0.76	0.82
保護者									
	PBI情愛	PBI依存期待	PBI決定尊重	IPA信頼	IPAコミュニケーション	IPA疎外	IWM安定	IWM回避	IWMアンビバレント
N	143	145	146	145	145	142	144	145	146
平均	4.21	2.47	3.93	4.21	3.14	2.94	3.73	3.31	2.94
SD	0.86	0.78	0.81	0.96	0.88	0.96	0.64	0.63	0.59
	就学前の安 定的な母子関 係	就学前の回 避的な母子関 係	就学前のアン ビバレント的 な母子関係						
N	144	145	145						
平均	4.36	2.33	2.58						
SD	0.90	0.94	0.87						

がいと育児は別である” “自分のやりたいことができなくて焦る” “育児ノイローゼに共感できる” の5項目である。

結果

1. 各尺度得点の算出

本報告では、各尺度について、それぞれ尺度に含まれる項目の得点を加算し、項目数で除したものを各尺度得点とした。各尺度得点の親子の平均点と標準偏差については表1の通りである。以下に各尺度得点について述べる。

i) IPA について

井上・大井・西村・井森 (2005) における因子分析結果に従い、3尺度の得点を求めた。3尺度とは、“両親は私の判断を信用してくれた” といった項目からなる「信頼」と、“私は両親に自分の悩み事や問題を話していた” といった項目からなる「コミュニケーション」と、“両親が察しているよりも私のいらいらは激しいものだった” といった項目からなる「疎外」である。

ii) PBI について

IPAに同じく井上ら (2005) の結果に従い、3尺度の得点を求めた。3尺度とは、“いつも暖かくて親しみのある声で話しかけてくれた” といった項目からなる「情愛」と、“私のことを、父・母がいなければ自分のことは何も処理できないと思っていた” といった項目からなる「依存期待」と、“私の望みのままに自由にさせてくれた” といった項目からなる「決定尊重」である。

iii) 内的作業モデル尺度について

安定、アンビバレント、回避の3尺度について得点を算出した。

iv) 就学前の母子関係について

就学前の安定的な母子関係、就学前のアンビバレント的な母子関係、就学前の回避的な母子

関係の3尺度を算出した。

v) 養護性尺度について

子ども質問紙において、方法で述べたとおり、「子ども赤ちゃんへの関心」「世話・養育に対するポジティブな感情」「親に対するポジティブな感情」「将来の子育てに対するネガティブ予測」「愛護のこころ」「奉仕的な志向」の6尺度の得点を求めた。

2. 親の養育表象と子どもの養育表象および養護性との関連

親の養育表象と子どもの養育表象・養護性との関連をみるために、親の各尺度と子どもの各尺度の相関を求めた (表2)。その結果、親の「PBI情愛」と子どもの「PBI情愛」・子どもの「IPA信頼」との間に正の相関が見られた ($r=.218$ $p<.05$ $r=.187p<.05$)。また、親の「PBI決定尊重」と子どもの養護性尺度の「奉仕的な志向」との間に正の相関が見られた ($r=.220$ $p<.05$)。親のIPA尺度と子の各尺度との関連においては、親の「IPAコミュニケーション」と子どもの「IPA信頼」との間に弱い正の相関があった ($r=.183$ $p<.05$)。親における他のIPA尺度とは関連がみられなかった。親のIWM尺度と子どもの各尺度との関連においては、親の安定尺度と正の相関が見られた尺度は、子どもの養護性尺度の「子どもへの関心」 ($r=.197$ $p<.05$)、「世話に対するポジティブな感情」 ($r=.196$ $p<.05$) 「奉仕的な志向」 ($r=.220$ $p<.05$) と、「IWM安定」 ($r=.249$ $p<.01$) の4尺度であった。また、親の回避尺度においては負の相関が、養護性尺度の「世話に対するポジティブな感情」 ($r=-.213$ $p<.05$)、「奉仕的な志向」 ($r=.215$ $p<.05$)、「IWM安定」 ($r=-.208$ $p<.05$) との間に見られた。親のアンビバレント尺度は、どの尺度とも関連が見られなかった。親の就学前の母子関係の各尺度においては、就学前の回避的な母子関係尺度において、

表2:親の各尺度と子どもの各尺度の相関

親/子	PBI情愛	PBI依存期待	PBI決定尊重	IPA信頼	IPAコミュニケーション	IPA疎外
PBI情愛	.218*			.187*		
PBI依存期待						
PBI決定尊重						
IPA信頼						
IPAコミュニケーション				.183*		
IPA疎外						
IWM安定						
IWM回避						
IWMアンビバレント						
就学前の安定的な母子関係						
就学前の回避的な母子関係				-.214*		.252**
就学前のアンビバレント的な母子関係						

親/子	子どもへの関心	世話に対するポジティブな感情	親に対するポジティブな感情	子育てに関するネガティブな感情	愛護のこころ	奉仕的な志向
PBI情愛						
PBI依存期待						
PBI決定尊重						.220*
IPA信頼						
IPAコミュニケーション						
IPA疎外						
IWM安定	.197*	.196*				.220*
IWM回避		-.213*				-.215*
IWMアンビバレント						
就学前の安定的な母子関係						
就学前の回避的な母子関係						
就学前のアンビバレント的な母子関係						

親/子	IWM安定	IWM回避	IWMアンビバレント	就学前の安定的な母子関係	就学前の回避的な母子関係	就学前のアンビバレント的な母子関係
PBI情愛						
PBI依存期待						
PBI決定尊重						
IPA信頼						
IPAコミュニケーション						
IPA疎外						
IWM安定	.249**					
IWM回避	-.208*					
IWMアンビバレント						
就学前の安定的な母子関係						
就学前の回避的な母子関係						
就学前のアンビバレント的な母子関係						

* : 5%水準で有意
 ** : 1%水準で有意

子どもの「IPA 信頼」との間に負の相関が ($r=-.214$ $p<.05$)、子どもの「IPA 疎外」との間に正の相関が ($r=.252$ $p<.01$) 見られた。

3. 親の子どもの育て方の認識と子どもの PBI・IPA・IWM・養護性尺度との関連

親の育て方の認識の違いによって、その子どもの尺度にどのような差が見られるかについて比較するために、親の育てかたの認識の各質問項目において、“よくやった”と“やらなかった”の2群にわけ、子どもの各尺度による t 検定をおこなった (表 3)。その結果、“ほめる”の項目において、“よくやった”と認識している親の場合には、“やらなかった”と認識している親の場合よりも、子どもの「PBI 情愛」と、「IPA 信頼」、養護性尺度の「親に対するポジティブな感情」において、有意に高い得点が示された ($t=-2.131$ $p<.05$ $t=-2.334$ $p<.05$ $t=-2.165$ $p<.05$)。PBI 依存期待においては、有意に低い得点が示された ($t=2.051$ $p<.05$)。また、“本を読んだりうたったりした”と

いう項目に関しては、“よくやった”と答えた群の方が、“やらなかった”と答えた群に比べて、養護性尺度の「世話に対するポジティブな感情」と「奉仕的な志向」に関して有意に高い得点を示した ($t=-2.129$ $p<.05$ $t=-2.233$ $p<.05$)。他の“しかる”“一緒に外出する”“手伝いをさせる”においては、差は見られなかった。また、親の育児に関する認識の各質問項目において、“同感する”群と“同感しない”群の2群に分け、子どもの尺度にどのような差が見られるか t 検定を行ったところ、どの認識においても差は示されなかった。

4. 親の介護に対する認識と子どもの介護に対する認識との関連

親の持つ介護に対する認識と子どもが持つ介護に対する認識との関連について検討するために、まず、親子の老いてくる親への世話に対する態度項目について因子分析を行った。因子分析の初期解には重み付けのない最小二乗法プロマックス回転を行った。スクリープロットなどを考慮した結

表3:親の子どもの育て方の認識と子どものPBI・IPA・IWM・養護性尺度との関連

		N; よくやった=128 やらなかった=16			
<ほめる>		PBI情愛		IPA信頼	
		よくやった	やらなかった	よくやった	やらなかった
平均		4.5	4.0	4.5	3.9
		>		>	
		*		*	
SD		1.06	0.84	0.97	1.00
		親に対するポジティブな感情		PBI依存期待	
		よくやった	やらなかった	よくやった	やらなかった
平均		4.4	3.9	2.6	3.1
		>		<	
		*		*	
SD		0.92	0.77	0.91	0.86
<本を読んだり、うたったりした>		世話にたいするポジティブな感情		奉仕的な志向	
		よくやった	やらなかった	よくやった	やらなかった
平均		4.1	3.3	3.9	3.3
		>		>	
		*		*	
SD		0.09	0.35	0.07	1.07

* :5%水準で有意

果 2 因子解が適当と判断した。2 因子の累積説明率は 45%であった。得られた因子パターンは表 4 の通りである。

第 1 因子は“私にとって、親の世話は生きがいである”“私は親が老いて病弱になったら親の世話をしたい”“親の面倒を私が見なくてはいけないと責任を感じる”“私は自分のことより親のことを考えてしまう”“私は親に苦勞をかけたので親の老後は楽をさせてあげたいと思う”“私は親のためならなんでもしたい”“私は親に頼られるのをうれしいと感じる”“私は実際に親の面倒を見ることになったとき素直に受け入れることができる”の 8 項目である。これらは、親の世話について積極的に受け入れる態度の項目であったため、「積極的自力介護」の因子と命名した。第 2 因子は“親を大切にしたい気持ちと実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある”“自分自身老いてくる

と親の面倒をみるのは体力的にも経済的にもつらいと思う”“精神的に親の支えになりたいが、病弱な親の世話は病院や施設にまかせたい”“親の世話に際しては介護サービスを利用したほうが良いと思う”の 4 項目であり、どちらかという自ら進んで親の世話をすることに抵抗感が見られる項目であるため、「消極的自力介護」の因子と命名した。また、それぞれの因子について各項目を加算し、項目数で除したものを尺度得点とした。親と子の各尺度得点の平均と標準偏差については表 5 の通りである。

「積極的自力介護」得点と「消極的自力介護」得点について親と子の関連を見るために相関を求めたところ（表 6）、親の「積極的自力介護」得点と子どもの「積極的自力介護」得点との間に正の相関が見られた ($r=.280$ $p<.01$)。「消極的自力介護」得点では両者の間に関連は見られなかった。

表4;老いてくだろう親の世話についての気持ちや態度の因子分析

因子パターン表		自力介護	他力介護
因子	項目		
(積極的自力介護) 第1因子	私にとって、親の世話は生きがいである	.731	
	私は親が老いて病弱になったら親の世話をしたい	.718	
	親の面倒を私が見なくてはいけないと責任を感じる	.708	
	私は自分のことより親のことを考えてしまう	.698	
	私は親に苦勞をかけたので親の老後は楽をさせてあげたいと思う	.687	
	私は親のためならなんでもしたい	.632	
	私は親に頼られるのがうれしいと感じる	.569	
	私は実際に親の面倒を見ることになったとき素直に受け入れることができる	.538	
(消極的自力介護) 第2因子	親を大切にしたい気持ちと実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある		.836
	自分自身老いてくると親の面倒をみるのは体力的にも経済的にもつらいと思う		.705
	精神的に親の支えになりたいが、病弱な親の世話は病院や施設にまかせたい		.521
	親の世話に際しては介護サービスを利用したほうが良いと思う		.360
因子寄与率(%)		37.9	7.6

表5;親と子の介護に関する尺度の平均と標準偏差

	親の積極的自力介護	親の消極的自力介護	子どもの積極的自力介護	子どもの消極的自力介護
N	133	137	141	141
平均	3.84	3.76	3.85	3.71
SD	0.69	0.74	0.83	0.74

表6: 介護に関する尺度の親と子の相関

	子どもの積極的自力介護	子どもの消極的自力介護
親の積極的自力介護尺度	.280**	-.094
親の消極的自力介護尺度	-.071	.140

** : 1%水準で有意

考察

親の養育表象と子どもの養育表象・養護性との関連については、「PBI 情愛」や「IPA 信頼」といったポジティブな尺度において、正の相関が見られた。それに対して、「IPA 疎外」や養護性尺度における「育児に関するネガティブ予測」などネガティブな尺度とは関連が見られなかった。これらの結果は、親が自身の親に対してよい養育表象を持っていると、わが子に対しても愛情をもった養育を行い、結果子どもの養育表象もポジティブなものになるといったことを示しているものと思われる。また、親自身が自身の親に対して疎外感などを感じていたとしても、必ずしもわが子に対する養育に直接関連しない可能性を示唆しているものと思われる。これは、自身が疎外感を持っていたからこそ、わが子には同じ思いをさせまいという意識が働くという場合も考えられる。そして、現在の愛着において親が安定していると、子どもの養育表象において、「子どもへの関心」、「世話に対するポジティブな感情」、「奉仕的な志向」と、養育に対するプラスの表象をその子どもが持っていることが示された。これらは、親自身がいかに育てられたかに関する認識よりも、今現在の内的作業モデルが安定しているかが養護性においては関連していることを示している。また、IWMの「回避」と養護性尺度の「世話に対するポジティブな感情」や「奉仕的志向」と負の相関が、「就学前の回避的な母子関係」尺度と子どもの「IPA 疎外」との間に正の相関が見られたことは、親が回避的な内的作業モデルを有している場合には、その子

どももネガティブなメッセージを受け取りやすく、子どもを守り育てるといった養護性が育ちにくいことを示していると思われる。回避的な愛着は、他者との交流そのものを避けてしまう傾向にある。そのような場合、子どもは自分が大事にされているという実感を持ちにくく、他者と関わること自体を避けてしまうのではないだろうか。それが、親の回避尺度が高いと子ども自身の世話に対するポジティブな感情等を持ちにくくさせているものと思われる。それに対して、同じ不安定な愛着と考えられるアンビバレントにおいて、他の尺度との関連が示されなかったという結果は、アンビバレントは、関わりそのものを避けてしまうわけではなく、一定ではないものの愛情そのものは伝わる場合があるために、養護性等と関連が見出されなかったのではないかと思われた。しかし、各尺度とも、子ども内、親内での各尺度の関連性に比べ、親子間での関連において強い傾向は示されなかった。唯一共通していたのは、「PBI 情愛」のみであった。このことは、親自身の親との関係がそのまま子どもに対して用いられていると考えるよりは、他の要素が多分に含まれているものと思われる。愛着の世代間伝達について、数井（2005）は、異なる3つの基本的立場が存在しているとしており、一つは第一世代の過去のある特質が第二世代の現在の同特質と連続性を有する場合、二つには第一世代の現在のある特質が第二世代の現在の同特質と連続性を有する場合、三つ目は第一世代の現在のある特質が第二世代のある別の特質と特異的な関連性を有する場合をあげている。多く

の愛着研究の関心は、一つ目の立場にあるが、研究の方法上、二つ目、三つ目を取り出している可能性が高いとしている。本報告においても、関連があったのは、どちらかという二つ目、三つ目のケースであり、さらに検討を重ねるならば、インタビュー法や過去の日記や第三者による査定などによって測定するなど、研究上の工夫が必要であると考えられる。

次に、親の子育ての認識の違いによって子どもの各尺度にどのような差が見られるか検討したところ、「ほめる」と「本を読んだり、うたったりする」のみ尺度によって有意差があった。よくほめたり、本を読んだりしてあげるということは、子どもの中でプラスの印象や感情を形成させるものと思われる。ほめられることで、親の愛情を自分のものと感じることができるのであろう。また、「PBI 依存期待」と有意に低い得点が示されたことは、ほめることが押し付けがましいものとは受け止められておらず、むしろ自律を促していたものと思われる。また、本を読んでもらった経験が、楽しい思い出と結びつき、養護性の中でも「世話に対するポジティブな感情」と「奉仕的な志向」の得点を高くしているものと考えられた。

親の介護に対する認識と子どもの介護に関する認識については、親が積極的に親の介護を受け入れている場合、子どもも、積極的な自力介護を認識しているという結果が得られた。消極的な自力介護に関しては、関連は見られなかった。これらは、親が積極的に介護を受け入れている場合、その子どもは親の様子を見ながら、介護に対するプラスのイメージを持ち、積極的に自身も介護に関わろうとする認識を育てていくものと思われる。しかし、消極的な自力介護に関連は見出されなかったことは、消極的だからといって子どもが消極的になるわけではなく、その家庭の事情などによ

って変わる可能性が示唆された。もしかしたら、消極的な自力介護も他にサポート求めることができると考えると、現実によく対応したやり方であるといえる。まったく介護に対して背を向けてしまうのではなく、その気持ちと手段とは別であり、消極的な自力介護の項目には他のサポートを望む項目も含まれるために、関連がはっきりとは見られなかったとも考えられる。今後はさらに項目を検討し、改めて調査を行う必要があるものと思われる。

最後に、本報告では親と子がそれぞれにもつ愛着に関する尺度と養護性に関する尺度において、全て一致しているといった結果は得られなかった。しかし、一部にはやはり情緒的で慈しみに満ちた親のモデルと子どものモデルが一致している結果も得られた。これらから、愛着システムと養育システムは全く別ではないものの、相互に関連するものも含みながらその人の中で独自に発達していくものであるということが示唆された。今後の課題としては、親子関係におけるどのような要素が愛着と関連し、養護性に影響を与えるのか詳細に見ていく必要があるものと思われる。また、今回は質問紙調査であったが、面接法や観察法などを用いても同じ結果が得られるのか、そして、個人の生涯を通じて変化するのかわからないのか、まだまだ不明な点は多い。養護性の測定方法、愛着の測定方法などの精度を検討していく必要があるものと思われる。今まで、愛着と養育システムは同時に語られることが多かったが、二つを分けて考えることにより、これからの養育・介護に関する問題へのアプローチの一助になるものと思われる。

謝辞

本論文作成にあたりご指導ご助言をいただきました、東京家政大学井森澄江助教授、井上俊哉助

教授、西村純一教授に深く感謝申し上げます。また、本研究にご協力いただきました皆様に厚く感謝申し上げます。

引用文献

- Armusden, G.C. & Greenberg, M.T. 1987 The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship to psychological wellbeing in adolescence, *Journal of Youth and Adolescence*, 16, 427-454.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss: vol.1 Attachment*. New York: (黒田実郎ほか訳 1976 母子関係の理論 1: 愛着行動 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: vol.2 Separation: Anxiety and anger*. New York: (黒田実郎ほか訳 1977 母子関係の理論 2: 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss: vol.3 Loss: Sadness and depression*. New York: (黒田実郎ほか訳 1981 母子関係の理論 3: 愛情喪失 岩崎学術出版社)
- 遠藤利彦 2005 第1章 アタッチメント理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 1-31.
- George, C., & Solomon, J. 1996 Representational models of relationships: Links between caregiving and attachment. *Infant Mental Health Journal*, 17, 198-217.
- 藤井まな 1994 Parental bondに関する基礎的研究—育児ストレスとの関連性— 関西学院大学教育学科研究年報, 20, 89-103.
- 井森澄江・岩治まとか・清水宏子・大井京子 2004 青年期女子の養護性の発達(1) 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 376.
- 井上俊哉・大井京子・西村純一・井森澄江 2005 親子関係の生涯発達心理学的研究(2) 第47回日本教育心理学会発表論文集, 212.
- 伊藤洋子 2003 中・高校生親準備性の発達 日本家政学会誌, 54, (10), 801-812
- 数井みゆき 2002 養育システムの発達と愛着システム 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術), 51, 45-63.
- 数井みゆき 2005 第7章 親世代におけるアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦(編) アタッチメント—生涯にわたる絆— ミネルヴァ書房 174-208.
- 小嶋秀夫 2001 第7章 慈しみ育む心と技能 小嶋秀夫 心の育ちと文化 有斐閣 147-165
- 中西由里・栗津幹子 1997 「養護性(nurturance)」に関する一研究(2)—妊婦と未婚学生の比較— 相山女子学園大学研究論集(社会科学篇), 28, 81-89.
- 岡林秀樹・杉澤秀博・高梨薫・中谷陽明・柴田博 1999 在宅障害高齢者の主介護者における対処法略の構造と燃えつきへの効果 心理学研究, 69, 486-493.
- 小野寺敦子 2003 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14, (2), 180-190.
- Parker, G., Tupling, H. & Brown, L.B. 1979 A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10.
- 酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9, 59-70.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度: 成人愛着スタイル尺度作成の試み, 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.

Abstract

The purpose of the present study was to investigate the correlation between parent-child relationships and nurturance. Nurturance is sympathy and skills to encourage sound development. While nurturance is deeply related to attachment, it is thought to develop according to a different system. In this study we conducted a questionnaire survey of 148 female college students and their caregivers, examining the relationship between attachment and nurturance from the viewpoints of upbringing and caregiving. The results indicated that the children of mothers who feel they were raised affectionately feel themselves to have been raised affectionately. Few other relations were seen. A correlation was seen between the attitudes of mothers and their daughters more in positive attitude than negative attitude. The children of parents who made an attempt to provide positive care demonstrated a high consciousness for providing positive care themselves. In the case of negative attitudes, no relation was observed. With regard to nurturance, similar trends were not always seen between mothers and daughters, indicating that a variety of factors are involved.

Key words: nurturance, parent-child relationships, attachment, intergenerational transmission, care